

美術体験に関する論述学習：高等学校におけるア トライティングの現状と可能性

著者	直江 俊雄
著者別名	NAOE Toshio
雑誌名	日本美術教育研究論集
号	40
ページ	3-12
発行年	2007
その他のタイトル	Learning by Writing about Artistic Experiences : The Present Situation and Prospects in Senior High School
URL	http://hdl.handle.net/2241/113517

美術体験に関する論述学習

—高等学校におけるアートライティングの現状と可能性—

筑波大学 直江俊雄

1. 目的と定義

本論文の目的は、美術体験に関する論述あるいはアートライティングによる教育について、その基本的な考えを提示するとともに、高等学校におけるその現状の一端を独自の調査に基づいて明らかにしていくことにある。関連して、学校教育における取り組みのための一つの支援策として企画した美術に関する小論文のコンテストについても述べ、今後の課題と可能性を考えたい。

「アートライティング (art writing)」とは、筆者が高等学校における美術に関する論述学習に焦点を当てた2005年1月の実態調査等で便宜上用いた名称であり、同調査の回答者向けの説明では「美術に関する経験を、文章等を用いて人に伝えること。」との定義を示した。しかしながら現在のところ一般的な用語とは言いがたく、また専門用語として定着しているわけでもないので、使用には当面注意が必要であろう。英語ではスポーツや科学などの分野における「スポーツライター (sports writer)」や「サイエンスライター (science writer)」などと同様に、美術を扱う記者や著述家が「アートライター (art writer)」と名乗る例が見られるほか、「アートライティング」として美術に関する記事や批評とほぼ同じ意味で使われる例も皆無ではないが、あまり一般的とはいえない。英語による美術教育研究の主題としては writing about art すなわち「美術について書くこと」あるいは単に writing と表記する例なども見られる¹。本論文の表題にはアートライティングの別称として「美術体験に関する論述」という表現も提示してみたが、今後も引き続き検討が必要であろう。

ここで、アートライティングあるいは美術体験に関する論述活動に焦点を当てる意味について少々述べておきたい。美術は言葉では語れない造形的な感覚や創作活動そのものの中にあるので、言葉による思考は美術学習では二次的な役割しかなく、場合によってはむしろその本質を損なうものである、という立場は傾聴に値するし、事実、教科としての美術や図画工作の独自性の一つの根拠となりうる考え方である。

しかし一方では、熱心な教師の努力に支えられて、子どもたちが楽しく活動し、高い意欲を示してすばらしい作品を作っても、それは授業の「題材」という世界の中だけで完結してしまい、彼らが将来社会に出たときに、自分の人生を深めるために美術に触れていく力を育てる、という側面が不足していたのではないかと、という懸念が離れない。それは私が公立中学校で教えていたときから一貫して抱いてきた課題でもある²。その詳細についてはまた別の機会に検討したいが、現時点の認識としては、たとえば作る過程を楽しむだけで、活動が終わると後は忘れてしまうような学習や、ものを作りたいという子どもの欲求に応えることだけで完結するような美術教育からの脱却をはかる方途を探る必要があると考えている。すなわち、子どもたちが美術の体験を自分の中に位置づけ、その後の自分の記憶、知識、行動の中に文字通り生かし続けていく力を育てるための、より具体的な学習方法が必要ではないか。そこで重要な役割を果たすのが、経験したことの意味を自分の言葉、すなわち思想でとらえなおし、語ることにあるのではないかと、というのが本研究の基本的な着想である。

いうまでもなく美術は単に本能的なものではなく、心から生じる衝動を文化という知的に受け渡される仕組みの中で共有していくものである。「美術は言葉を越えたものだ」という認識自体が、言葉を通して思考されるものであり、それほどまでに言語は私たちの思考活動の基礎をなしている。その部分を除外するのではなく、むしろ積極的に学習のために使っていく戦略が必要であると考える。

実践的には、アートライティングによる教育とは、授業において美術批評文などを書くということに限定されるべきではない。むしろ美術の学習の様々な場面でこれまでも行われてきた、言葉で考えることの役割を、一層

積極的に浮かび上がらせていこうとするものである。そうした教育実践の成果を集約し、私たち共通の問題として考えていくために、たとえばアートライティング、もしくは美術体験に関する論述という概念の使用を提唱する。名付けたときにそれが私たちの思想の中ではっきりと存在し始めるからである。そこでここでは先の定義を一步進めて、アートライティングによる教育について、次のように規定してみたい。

「言葉による思考を促して、美術に関する学習の深化・共有・定着をはかる上で、文章表現の過程を積極的に用いること」

すなわち、美術に関して個人内部の学習を深め、教師や他の学習者と共有することによってさらに啓発を受け、自らの思考の中に定着させていく、その過程において言語活動の役割を重視するとともに、口頭で会話したり討論したりすることに加えて、思考の流れを整理し、記録として残り、時間を超えて共有したり再認識したりできる文章記述の役割に焦点をあてていくことである。

それは、「学習の起点」としてはたとえば作家の言葉を読んだり、解説や批評文を読んだりして学ぶことが含まれるであろうし、「過程」としてはたとえばポートフォリオやスケッチブックなどに作品制作やそのための調査の過程で集めた資料やアイデアを記録しながら学習の成果を確認していく活動も含まれるであろう。「評価」としてはたとえば自己評価として学習を振り返る機会として、また「成果」としては文章表現それ自体を小論文などの形にまとめる場合が考えられる。

2. 本研究の背景ならびに方法

このような観点からこれまで行われてきた研究として、どのようなものが参照できるであろうか。日本美術教育連合における過去の研究論文を1968年発行の創刊号から順に探してみると、たとえばかなり初期の1969年に鳥居昭美が幼児の観察結果をもとに、行動、言葉、イメージ、描画へと順を追って成立する経過を見だし、3・4歳前後の教育においてこれらの要素の関連、とくに言語の発達の重要性を考慮する必要性を述べている³。しかしそれ以後、美術教育における言語の働きを中心的な主題に据えた研究は乏しい。また、1990年代半ば頃から、いわゆる鑑賞教育に関連する研究が継続して発表されるようになるが、そこでは学習の過程で文を書くことが一定の役割を果たしている例も見ることができる⁴。一方、高等学校における美術教育の研究については、これまで（2005年刊行の第38号まで）に少なくとも11件の論文が掲載されているのを確認したが、その中で本研究との関連では、1969年の第2号で飯沼道子が、それまで写生を中心に学習してきた高校生に心象表現を行わせる際に、内面表出の困難を乗り越えさせる手段として言語表現を用いる考えを述べていることが初期の例として注目される⁵。また、アートライティングに関したものではないが、2002年には森田耕太郎が、12都府県の都府県立高等学校普通科約900校を対象に美術の学習内容を調査した結果を報告し、今後の美術教育研究における学校教育現場での広範囲での実態把握の重要性を示唆した。

先に述べたような原則からすれば、アートライティングによる教育とは、美術に関する学習のあらゆる段階でさまざまな活動と結びついていくものであり、国内外における過去の研究成果を探究すれば、さらに埋もれていた知識が明らかになる可能性があるため、これについては今後も調査を継続し、別の機会でもまとめて論じることを目指したい。

そうした広がりの可能性をもつアートライティングの教育に関し、本論文ではとくに、高等学校段階における学習の実態に関する全国調査と、その促進策としてのコンテスト創設という側面からの取り組みを示すものである。高等学校での取り組みから始める理由は第一に、美術の論述に関わる教育方法は、我が国では大学教育における専門の美術史・芸術学の教育においても未発達であると考えられており⁶、高等教育における専門課程と、その前の段階の普通教育との双方において、あるいはその連携の上に確立していくことが必要ではないかと考えたことが挙げられる。第二に、後期中等教育の学習者は小論文のような形式で一つのまとまった思想として表現することに挑戦できる段階にあり、コンテストへの応募による奨励活動に適するのではないかと考えられたこと

も理由の一つである。

また、コンテストによる奨励策を企画した背景についても若干触れておきたい。先にも指摘したように、美術に関する論述の機会、美術学習のあらゆる場面で発生すると同時に、一つのまとまった小論文に仕上げるためには、従来の授業時間内を超えた取り組みを必要とする。逆説的なようではあるが、限りある授業時間数の枠組みを超えて取り組めることは、むしろそれに縛られずに発展の余地をもってしていると捉えることも可能ではないだろうか。少なくともいくつかの学校では、たとえば総合的な学習の時間などを通して、美術に関する研究テーマに沿って小論文を執筆する取り組みなどがすでに報告されている⁷。

また、絵画などの作品展覧会に伴う選抜や授賞などの振興策が幼児期の段階から非常に多く開催されているのに比べて、美術に関する文章表現のコンテストはまれであることから、教育現場に新鮮な印象を与え、これまで光の当たらなかった子どもたちにも美術に取り組み、認められる機会をもたらすことができるかもしれないという、運動促進者としての期待が動機の一つとなっている。さらに、コンテストに挑戦したことを契機に、美術理論や芸術の支援活動を学ぶことに興味をもつ生徒が増えれば、専門教育における人材養成の層にも厚みが増し、我が国における文化芸術環境を形成していくリーダーシップ育成にも、何らかの影響をもたらす可能性が考えられる。中等教育と高等教育の連携は、このように芸術教育は一つの社会改革でもあると捉えることにつながるという点でも意義があるように思われるのである。

しかし、新しいコンテストによる教育振興策の可能性を認めるとしても、学校教育における現状が不明のまま進めることはできない。そこでまず広く高等学校における美術論述学習の状況を調査し、その結果を基礎に学習を奨励する全国コンテストを実施するとともに、その過程を通してアートライティングによる教育への認知を広げ、また現場の取り組みを支援し、応募作品からも全国の取り組み成果を収集し、公開していくという循環的な支援環境の形成を展望しつつ進めることを構想した。こうした展望のもとに、本稿では、2005年1月に実施した「高等学校におけるアートライティングの教育に関する調査」の結果から、主として全国の高等学校普通科・美術科の教育課程における美術に関する論述学習の主な傾向、教師による同学習の意義についての見解、コンテストをはじめとする同学習の取り組みへの見通しなどを中心に検討するとともに、同調査結果を基礎に実施したコンテストによる教育支援活動の概要を述べ、今後の課題を考えていきたい。

3. 高等学校におけるアートライティングの教育に関する調査

(1) 調査の概要

本調査の目的は、高等学校における美術の論述学習の現状と課題を把握し、新規企画のコンテストをはじめ、今後のカリキュラム開発・教育支援策立案に対する教師からの意見や要望を収集することである。方法としては、次の三段階によって実施した。第一に、高等学校教諭への聞き取り調査であり、2004年10月に首都圏の3校を訪問して美術科教諭に面接し、各学校での美術教育の状況、その中でも美術に関する論述教育の取り組みと今後の課題、コンテスト等企画への意見を聴取した。第二に、質問紙による予備調査であり、2004年11月に、あらかじめ協力を承諾した6校の高等学校教諭を対象に郵送によって質問紙を送付・回収した。第三に質問紙による本調査であり、予備調査の結果をもとに質問項目等を修正し、全国の高等学校に対して2005年1月に実施した。本調査の対象は、全国の高等学校数（平成16年度5254校）の約20%にあたる合計1041校に質問紙を郵送し、最終的に307校からの回答を有効として集計した⁸。本調査における主な質問の構成は以下の通りである。なお、問5に関しては、コンテストの概要を記した予告通知を同封し、印象等の回答を求めた。

問 1. 基本情報…学校名、開設課程と在籍生徒数

問 2. 開設科目等…美術と美術理論に関する開設科目と受講生徒数、教科書使用等

問 3. 学習活動

3-1. アートライティングの学習の実態

- 3-2. アートライティングの学習の意義
- 問 4. 進路…美術の実技や理論に関する進路状況
- 問 5. コンテスト
- 5-1. ～5.3. 各種コンテストへの参加状況等
- 5-4. 美術小論文コンテスト予告についての印象
- 5-5. コンテスト、アートライティング教育への意見自由記述

(2) 学習の実態

質問3-1.では、「アートライティングの学習の実態」として、用意した12項目の活動について、教師の観点から5段階でその程度を回答するように求めた。12項目の設定に関しては、まず10月から11月にかけての面接調査や質問紙による予備調査によって、現場では作品の制作活動に伴って文を書くことが比較的広く行われているとの観測をもったので、第一に制作の振り返りに関する4つの質問からなるカテゴリを設定した。第二に本来美術批評の分野と関連の深い作品鑑賞に関する3つの質問から構成されるカテゴリを、第三には今後の美術概念の発展の方向として社会的な活動への参加体験に関する3つの質問からなるカテゴリを設定し、その他の活動と発表活動に関する質問を加えて12項目とした。学習の実態を報告するものであるので、体系的に答えやすいよう、質問の順序は同じカテゴリ内の質問項目を続けて配列した。これに該当する質問のほぼ全文を註記に⁹、また回答を集計した比率を表1に掲載する。たとえば第一問は「自分の作ったアート作品について、発想や意図などを生徒が書く」であり、表1の該当欄では「自己作品意図」と略記した。

表1 アートライティングの学習実態

有効回答数 (307) に対する%

質問カテゴリー	制作の振り返り				美術作品鑑賞			参加体験			その他	
	1. 自己作品意図	2. 自己作品過程	3. 自己評価	4. 相互評価	5. 複製作品	6. 実物作品	7. 作品調査	8. 授業体験	9. プロジェクト体験	10. ボランティア体験	11. その他テーマ	12. 文章発表
よく行う	26.7	16.6	23.8	9.4	5.5	3.9	2.3	4.9	0.7	0.7	2.3	3.6
時々行う	36.5	32.2	25.7	20.2	28.3	16.0	17.6	21.5	1.0	1.0	9.4	8.8
まれに行う	20.2	20.8	24.4	30.3	37.5	28.0	35.2	28.0	10.7	4.9	14.3	18.9
行わない	16.3	30.0	25.7	39.7	27.7	50.8	44.6	44.3	84.0	88.3	66.1	65.8
わからない	0.3	0.3	0.3	0.3	1.0	1.3	0.3	1.3	3.6	5.2	7.8	2.9
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
実施率 (よく+時々)	63.2	48.9	49.5	29.6	33.9	19.9	19.9	26.4	1.6	1.6	11.7	12.4

表中に示したように、作品制作の振り返りに関する質問カテゴリーでは質問番号1.の「自己作品意図」を書く学習に「よく行う」「時々行う」を合わせて（以下「実施率」と表記）63.2%が肯定の回答を示し、もっとも広く行われている活動であることがわかる。この結果からは、作品制作は作者が抱いた発想や意図を実現することが目的であり、その元の意図を明らかにすることが重要である、とする観念を見ることができのかもしれない。しかしながら、作者自身にとっての制作の意義をとらえ直すならば、元の意図が実現されたかどうかということ以上に、その過程で出会った試行錯誤や予期せぬ事態への反応を通して新しい見方を学ぶことにも、美術の豊かな経験の価値があるという見方もできるのであり、そうした途中の過程への振り返りをこそ、いっそう重視すべきなのではないかと考える。その意味で、単に制作の意図のみを断片的に記録するのではなく、制作過程全体を振り返って自己にとっての意味を思考する小論文形式の取り組みに可能性を見いだすのである。

主に作品の鑑賞や批評に関わる第二の質問カテゴリーでは、質問番号5.の「専門家のアート作品（図版・複製）を見て、感じたことや考えたことなどを生徒が書く」（「複製作品」と表1に略記）が33.9%の実施率であり、

以下、実物作品を見て書く学習と、作品について調査して書く学習の実施率がともに19.9%を示した。おそらく文には書かない形での作品鑑賞はより多く行われているものと思われる。鑑賞学習について言葉で語ったり文に書いたりする活動は、学習者の達成度を評価するための記録という側面もあるが、学習者自身の美術体験にとってどのような役割を果たすのかという点については、今後の研究が必要とされるのではないかと考える。筆者の個人的な経験ではあるが、公立中学の2年生だった時、美術の教師は毎回授業のはじめの10分くらいをとって教科書の図版作品について思ったことなどを書かせ、発表させていた。私はその授業で自分がある画家の独特な表現の特徴を見つけて発表できたことを、それに気づくことのできた喜びとともに未だによく覚えている。今までに無数の美術作品を見てきたはずであるのに、振り返ってみると、思い出せる作品というのはそれほど多くはないことに気づくというのは、私だけの個人的な経験であろうか。そして多くの場合、生涯にわたって思い出される重要な作品というのは、単にその視覚的イメージだけではなく、それについて文に書いたり、誰かと語ったり、あるいは心の中で自分に向かって何度もそれについて問い返したりした経験と結びついているのである。こうした、言語による思考と永続して記憶される美術経験との関係については、近い将来により体系的な研究として取り組む必要があると考えている。

第三の質問カテゴリーは、観客が参加する形式のアートプロジェクトや、美術を通じた社会的なボランティア活動など、今後拡大が期待される活動の経験を書くというものであるが、当然学校の教育課程として実施することは困難であるので、実施率は非常に低い結果となっている（「プロジェクト」「ボランティア」ともに1.6%）。この質問項目の設定には、実態把握という目的だけではなく、課外活動も含めてこうした幅広い芸術の社会的活動に学校や生徒の目を向けるという啓蒙的な意図も働いている。なお、質問番号8.には、美術の授業も一つの社会的なアートプロジェクトであるととらえるのではないかとという観点から、「自分の参加した美術の授業の体験を生徒が書く」（実施率26.4%）と入れてみた。

この調査結果から学習活動の実態をまとめてみると、「制作の振り返り」と「美術作品鑑賞」がほとんどであり、それ以外の活動は、社会的なアートプロジェクトへの「参加体験」を含めて非常に乏しいということが明らかとなった。これらの結果は小論文コンテストのテーマや応募ジャンルを、今後の発展の方向を示すとともに現実の学習活動を基礎に設定するという条件を満たす上での基礎資料ともなった。

(3) アートライティングの学習の意義についての見解

質問3-2.では、アートライティングの学習のもつ意義を述べた9項目の観点について、教師の見解を5段階で選択することを求めた。その質問項目のほぼ全文を註記に掲載し¹⁰、回答の比率を集計した結果を表2に示す。回答者の意識を尋ねる目的であるため、質問紙では関連するカテゴリーに属する質問群を意図的に無秩序に配列した。すなわち、1.「主体的な鑑賞の態度」や7.「鑑賞批評能力」を高めるという「鑑賞」学習としての意義、3.「主体的な作品制作の態度」や6.「作品制作の質」を高めるという「作品制作」への効果、4.「自ら調べ、考える能力」や5.「自らの考えを表現する能力」を高めるという「一般的能力」への効果、8.「芸術に関する認識」や9.「人格形成や精神的成長」への寄与を期待する「その他」の質問カテゴリーである。

結果として、鑑賞の学習に寄与するとした1番と7番への肯定的回答（「そう思う」と「ややそう思う」の合計）がともに91.5%を示したことや、思想表現の能力に結びつくとした5番への回答が93.2%に達したことなどは、ほぼ予想される傾向である。しかしながら、結果の中で注目できる点は、主体的な作品制作の態度を高めるとした3番への肯定的回答（82.1%）と、作品制作の質を高めるとした6番への肯定的回答（72.3%）がともに高い割合を示したという点にある。註8でも指摘したように、この調査に回答するという行為を示した教師群は、回答しなかった教師群よりもこの調査の内容に興味や期待を抱いている割合が高いであろうという推測を考慮するならば、アートライティングの意義についてどんな項目でも高い肯定群が発生するのではないかとという疑問が生じうる。しかしながら、「進路の可能性を拓げる」とした2番への肯定的回答の合計は48.9%にとどまったこ

とを考えるならば、回答者の多くは、質問の内容を吟味する批判的思考を放棄したわけではないことが確認できる。回答した教師の内、これほどの高い割合にとって、文章表現は作品制作の妨げでも無関係なものでもなく、むしろ貢献しうるものであるとの認識が広まっていることは、今後の発展を考える上で重要な要素の一つになると考える。

表2 アートライティングの意義についての見解

有効回答数 (307) に対する%

質問カテゴリー	鑑賞	その他	作品制作	一般能力	一般能力	作品制作	鑑賞	その他	その他
質問項目 (略記)	1. 主体的鑑賞	2. 進路	3. 主体的制作	4. 調査思考	5. 思想表現	6. 作品向上	7. 鑑賞力	8. 芸術認識	9. 人格形成
そう思う	61.2	13.7	42.3	56.4	62.5	30.0	55.7	52.4	28.7
ややそう思う	30.3	35.2	39.7	31.3	30.6	42.3	35.8	39.1	44.0
どちらともいえない	6.8	40.4	14.0	9.8	5.2	20.5	7.2	6.8	23.8
あまりそう思わない	0.7	7.5	3.3	2.0	1.3	6.2	1.0	1.3	3.3
そう思わない	1.0	3.3	0.7	0.7	0.3	1.0	0.3	0.3	0.3
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
肯定群 (やや+そう思う)	91.5	48.9	82.1	87.6	93.2	72.3	91.5	91.5	72.6

(4) アートライティングの教育に対する自由記述

表3は、高校生対象の美術小論文コンテストの実施予告についての意見や、アートライティングの教育についての意見を自由に記入することを求めた回答の一つひとつにアフターコーディング（分類符号化）を行い、主要な論点を分類した結果をまとめたものである。大まかな傾向としては、回答者の27.7%がこの提案に賛同するか参加意欲を示しており、3.3%が反対意見や疑問を呈しており、19.2%は実施上の困難を訴えている、という結果が明らかになった。賛同・意欲を示した回答には、いくつかの典型が見られる。第一は表中の回答例の一番上に示したように、「美術史や評論に興味がある」一部特定の生徒にとっての意義を認めている例である。第二に、その次の回答例のように、「美術関係の進学者以外にとっても、多様なものの考え方を育成する上でよききっかけになる」と、広く一般生徒にとっての意義を認める例である。第三に、「制作する行為だけがARTではないという意味で、おもしろい方法だと思います。」と、誰にとってというわけではなく、いわば本質的意義に興味をもって賛同している例が見られる。第四に、「人間の感覚的な内容の様に抽象的でもある内容を論述することを不得意としていることが目立つ。それだけにこの部分について開拓・活性化していくことは有意義かつ重要」と新分野開拓の意義を認める例が見られる。第五に、「アートライティングの教育はこれから取り入れていきたい」と思います。とても興味を示す生徒も多いし、教師の持っていき方でより深くアートにかかわれる」との回答のように、自らの取り組みに対する意欲を表明する例も見られた。

これらに対して、明確に反対や疑問を呈する例は、3.3%と少ないが、表中の「反対疑問」の欄に挙げたような回答例が見られた。たとえば、現在の美術評論への批判をもとに疑念を抱いている場合や、造形と論理との相違を指摘する例、またこの分野の認知不足を指摘する例などである。

表3 コンテスト、アトライティングの教育に対する自由記述分類

有効回答数(307)に対する%

分類	%	細分類	%	回答の例
賛同意欲	27.7			<ul style="list-style-type: none"> ・美術史や理論に興味がある生徒も、ごく少数ですがいると思いますので興味はあります。(特定生徒ことでの意義) ・美術関係の進学者以外にとっても、多様なものの考え方を育成する上でよききっかけになると思います。(一般生徒ことでの意義) ・制作する行為だけがARTではないという意味で、おもしろい方法だと思います。(本質的意義) ・人間の感覚的な内容の様に抽象的でもある内容を論述することを不得意としていることが目立つ。それだけにこの部分について開拓・活性化していくことは有意義かつ重要であると感じる。(新分野開拓) ・アトライティングの教育はこれから取り入れていきたいと思います。とても興味を示す生徒も多いし、教師の持ついき方でより深くアートにかかわれると思う。(取り組み意欲)
反対疑問	3.3			<ul style="list-style-type: none"> ・現在の美術理論の様な理由なき権威主義者を育成するようなプログラムにならないよう願います。 ・論理、分析・描論等々の能力教育は、造形と異なる領域分野の教育ではないだろうか。 ・アトライティングは、美術科において、どれだけ教育価値があるのか、まだよくわからない。 ・「アトライター」「アトライティング」という言葉がまだ認知されていないように思われます。
実施困難	19.2	時間余裕	11.1	<ul style="list-style-type: none"> ・本校では17年度から美術の必修単位数が3→2に減ってしまいます。このような時に“文章で表現する教育”は美術の授業で行うのはむりです。 ・進学校においては日々の学習が精一杯のため、指導に余裕がない。 ・「アートのすばらしさ」という大きなテーマをじっくり考えさせる、体験させる時間と機会がないのが高校美術の現状です。
		実技中心	3.6	<ul style="list-style-type: none"> ・本校は授業・クラブ共、実技を主に展開していますので、文章表現を多く入れるのには難しさを感じます。 ・高校生段階として「アートに関心がある」イコール「作品を制作する」と概ね捉えている。 ・アトライティングは大切と考えますが、高校での美術の授業は2単位のみですので油彩実技で時間がなくなります。
		生徒関心	2.3	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒が文章で表現することにどこまで興味をもてるか不安も大きい。 ・アトライター大賞はおもしろいとは思いますが、生徒のアートに対する知識・興味が低くて、今は難しい気がする。 ・大変ユニークな試みだと感じます。しかしながら現在の本校生で、興味を持ちそうな生徒が思い浮かばないので残念です。
		知識文章	2.3	<ul style="list-style-type: none"> ・美術的体験や探究を文章表現するためには、美術用語や用具・材料名を正確に記す必要があるが、本校生の場合、そのような知識欲は希薄である。 ・作品研究などは、まったく違った視点からの意見等が見れそうに関心があるが、どの程度のものが出てくるのか心配でもある。 ・今まで様々な造形作品の募集はあったがこの度のようなのは初めてで新鮮である。ただ美術への関心、理解と共に文章力が要求されるので簡単には誰でも応募はできにくいと思われる。
要望その他	7.2			<ul style="list-style-type: none"> ・アトライター大賞に応募させたいと思っているので、大学生が書いたエッセイなど、参考になるものを提示していただけると助かります。 ・美術科、国語科、社会科の同等な領域だと思う。 ・アトライティングはほとんど行わないが、生徒が自分で製作したもの、描いた油絵等、皆の前で発表する形式をとっています。
無記入	42.7			
	100.0			

主に実施困難を訴えた回答も19.2%に上るが、その大部分は、意義には賛同しつつも実際は難しい、という二面性を抱えていることが記述から明らかになった。この回答には解決すべき重要な課題が含まれている可能性もあるので、さらに詳細に分類して検討してみたい。実施困難の中で最も多い訴えは、時間や余裕が不足しているというもので、回答者全体に対して11.1%、困難とした理由の中では半数以上を占める。また、実技中心のカリキュラムの中での導入困難を報告している例の中には、たとえば「高校での美術の授業は2単位のみですので油彩実技で時間がなくなります」と、時間の不足ともとれるような内容が含まれる場合もあるが、2単位の中で油彩実技を最も優先させるという義務はないわけであるから、実技中心のカリキュラムを主張したものと解釈した。また、数は多くないものの、生徒が関心を持ちそうもないと決めつけている例、取り組む前からあきらめているような記述については、教師の側の意識改革を支援することも今後必要ではないかと考えられる。最後に、知識や文章力の不足を訴える例も少数ではあるが見られた。これは、コンテストへの応募や入賞を果たそうとする場合には大きな課題となる可能性も考えられる。一方で、一律に評価されるコンテストの場面に必ずしも収束されなくても、さまざまな水準や場面において、書くことの効果を体験できるための指導法開発も課題の一つであると考えられる。なお、授業時間不足についての解決の一つの鍵は、何人かの回答者が自らこの回答に記している。すなわち、従来の美術の授業の時間内では小論文としてまとめるところまではできないので、総合学習やその他の課外活動を含めた、柔軟な枠組みの中で指導していきたいというものである。

4. まとめと課題

このような調査結果をもとに、「高校生のためのアトライター大賞」と題する美術小論文コンテストを実施した。応募規定には、共通テーマとして「アートのすばらしさを人々に伝える」文章を2000字以内で自分自身の体験に基づいて書くことを掲げ、「制作体験」「作品探究」「芸術支援体験」の三つのジャンルの中から応募者が選択することとした。この三つのジャンルは、先の調査で示した学習実態と今後の発展への期待に基づいた分類を反映したものとなっている。

2005年4月、質問紙調査を依頼したほぼ同じ数の高等学校に、コンテストの応募要項やポスターを送付し、次いでウェブサイト上での情報提供や電子メールでの問い合わせを開始した。6月には、これから美術小論文に取り組む高校生向けのガイドブックを作成し、同じく全国の高等学校に発送した。本調査の自由記述にも見られたように、取り組みの参考やヒントになる資料への要望が高まっていると判断したからである。同ガイドブック（『art writer』）は、「アトライターとは何か」という問いかけから始まり、どのようにテーマを探すか、執筆へのジャンル別アドバイス、質問と答え、現役美術ジャーナリストからのメッセージなどを豊富なカラー写真とともに掲載したものである¹¹。最終的に171編の論文が全国から寄せられ、外部選考委員を交えた審査を経て3名の大賞、1名の特別賞、24名の優秀賞と7校の学校賞を決定し、2006年1月に授賞式を実施した¹²。

コンテストの実施を通じたアトライティングによる教育の支援活動については、限られた授業時間の枠を超えた柔軟な取り組みを促し、全国の学校の成果から学ぶ交流を支援することができるという意義が認められる一方、コンテスト形式の限界として、必ずしも小論文にまともまらないような形式のアトライティングの実践に対してどのように光を当てるかという課題も考えられる。これについては、理想的には、授業の様々な活動において言語による振り返りや討議の効果を浸透させつつ、一方で小論文執筆のためにまとまった総合的な時間や課外学習などの特別な時間を設けるといようなサイクルが出来上がれば一つのモデルになりうるのではないかと考えられる。

高等学校でのアトライティング教育の調査には、調査対象の約3分の1の学校からの回答があり、その意義についての教育者側からの理解や期待は一定のものがあることが明らかになった。中でも、調査の過程で設定した主要な学習の方向性について、論述活動と本来密接な関係がある鑑賞や批評のみでなく、むしろ現在の学校での美術学習の大部分の時間を占めていると考えられる、いわゆる「実技」による作品制作の過程において文を記述することに抵抗が少ないことが明らかになった点は、今後の発展の基礎として重要である。回答内容に認められたような実施上の困難に対して、コンテストによる奨励策を含む研究者側からのアプローチと、各学校で現状に応じて取り組んだ成果が今後どのような解決方法を見いだしていくかが課題であると考えられる。

本論文では主として単純集計からわかることを中心に検討した結果を述べたが、統計的な分析は完了したわけではない。また実際に応募された小論文が、本調査で示されたこれまでの学校での学習実態と比較してどのような傾向を示しているかについても、今後明らかにしていく必要がある。また、美術について語ったり書いたりすることの効果や問題点をより具体的に明らかにしていくような基礎的な研究も一層必要となってくると考えられる。さらに、こうした調査やコンテスト等による支援活動の継続を通して、現場との対話を広げていくことの重要性が再認識されるのではないだろうか。研究によっていくつかの理想的なモデルを作り出すことができたとしても、現場での展開の可能性は教師の数だけ、あるいは学習者の数に応じて存在しうるため、そうした事例と常に交流することが不可欠だからである。

註

- 1 たとえば、全米美術教育学会第46回大会（2006年）では、次のような題目の研究発表があった。Housen, Abigail “Writing About Art and the Art of Writing.” Petkau, Judi W. “Art and Writing: Connecting Creativity.” Basseches, K.B. “Writing and Reading in the Art Classroom.” (National Art Education Association 46th Annual Convention, Chicago, Illinois, 2006.)
- 2 「美術について（「感じること」は当然としても）、「思考すること」「語ること」を封じ、ただ「為すこと」のみが支配的であるならば、学習者が、自らの学習の意味と、社会における美術との関係を自覚する機会を、充分に得ることができるかどうかは、疑問である。」（直江俊雄「日本と英国—芸術と教育の連続性を巡って」宮脇理編『緑色の太陽』国土社、2000年、58頁）
- 3 鳥居昭美「言語と創造性」『日本美術教育研究紀要』第2号、1969年、10～11頁。
- 4 たとえば、宇賀伸俊彦「鑑賞学習による美術文化理解の可能性」（『日本美術教育研究紀要』第36号、2003年、35～42頁）では、漫画作品の鑑賞授業において、教師の設定した指導案に沿って学習が深まっていく様子を学習者の書いた文章の変化からも確認している。
- 5 飯沼道子「高等学校美術に於ける心象表現」『日本美術教育研究紀要』第2号、1969年、12～13頁。
- 6 「美術作品の記述の方法について、大学できちんとした講義を受けた記憶がない。作品の記述方法はそのまま美術の見方やその研究方法とつながっている以上、純粋な記述というものは考えられないだろうが、日本のアート・ライティングに関する教科書は聞いたことがない。」（五十殿利治『平成16年度筑波大学「教育プロジェクト」報告書 芸術環境形成支援のためのアート・ジャーナリスト養成』2005年、1頁）
- 7 たとえば、埼玉県立大宮光陵高等学校（「総合的な学習の時間課題研究小論文・グループ発表集」平成16年度美術科第1学年）や筑波大学附属駒場中・高等学校（土井宏之「中等教育における芸術学の教育：総合学習『ゼミナール』の実践から」『平成17年度筑波大学教育プロジェクト報告書 芸術環境形成支援のためのアート・ジャーナリスト養成』2006年、43頁）などに総合学習における取り組みの例を見ることができる。
- 8 対象学校の抽出に当たっては、全国の高等学校が公開している教育課程等を調査し、各都道府県の全日制高等学校数の約20%に当たる数に達するまで、該当する学校（普通科、美術科、総合学科等を設置する学校で、できる限り美術の授業を開設していることが確認できる学校）を選択する方法をとった（有意抽出）。回答者は本調査が扱う教育の内容に関心を持った教諭である割合が高いことが予想され、その意味での回答の傾向性が考えられる。実際には355校から回答があったが、本論文では集計分析、比較作業をより厳密に行うために、一部でも未回答項目のあるものや実際には美術の授業が開設されていなかった学校からの回答などをすべて除き、307校分を有効回答とした。入力はず2名のスタッフが担当し、相互に誤入力がないか確認を行った上で、別の2名によってさらにすべての入力済み項目を検証して誤入力をできる限り排除した。
- 9 (3-1. 質問項目より。各項目の後の括弧内は表1で対応する略語を示す。) 次のようなアートライティングの学習は、貴校ではどの程度行われていますか。最も近いと思われる記号に○をつけてください。
 - a. よく行う b. 時々行う c. まれに行う d. 行わない e. わからない
 1. 自分の作ったアート作品について、発想や意図などを生徒が書く（自己作品意図）
 2. 自分の作ったアート作品について、制作過程での試みや考えなどを生徒が書く（自己作品過程）
 3. 自分の作ったアート作品について、自己評価を生徒が書く（自己評価）
 4. 他の生徒が作ったアート作品を見て、感じたことや考えたことなどを生徒が書く（相互評価）
 5. 専門家のアート作品（図版・複製）を見て、感じたことや考えたことなどを生徒が書く（複製作品）
 6. 専門家のアート作品（実物）を見て、感じたことや考えたことなどを生徒が書く（実物作品）
 7. 専門家のアート作品について、調べたことを生徒が書く（作品調査）
 8. 自分の参加した美術の授業の体験を生徒が書く（授業体験）
 9. 自分の参加したアートプロジェクト等の体験を生徒が書く（プロジェクト体験）
 10. 自分の参加したアートに関するボランティア等の体験を生徒が書く（ボランティア体験）
 11. 上記以外で、アートに関する文章を生徒が書く（その他テーマ）
 12. アートに関して自分の書いた文章を生徒が発表する（文章発表）
- 10 (3-2. 質問項目より。各項目の後の括弧内は表2で対応する略語を示す。) アートライティングの学習には、どのような意義があると思いますか。以下のそれぞれについて最も近いと思われる記号に○をつけてください。
 - a. そう思う b. ややそう思う c. どちらともいえない d. あまりそう思わない e. そう思わない
 1. 主体的な鑑賞の態度を高める（主体的鑑賞）
 2. 進路の可能性を広げる（進路）

3. 主体的な作品制作の態度を高める（主体的制作）
 4. 自ら調べ、考える能力を高める（調査思考）
 5. 自らの考えを表現する能力を高める（思想表現）
 6. 作品制作の質を高める（作品向上）
 7. 鑑賞・批評能力を高める（鑑賞力）
 8. 芸術に関する認識を高める（芸術認識）
 9. 人格形成や精神的成長に寄与する（人格形成）
 10. その他（具体的に記入してください）
- 11 記録として『平成17年度筑波大学教育プロジェクト報告書 芸術環境形成支援のためのアート・ジャーナリスト養成』（2006年、11～16頁）に収録。
- 12 コンテストの運営は、筑波大学における教育プロジェクト「芸術環境形成支援のためのアート・ジャーナリスト養成」の一環として芸術学専攻の組織で実施し、直江が事務局を務めた。同プロジェクトは、平成16～17年度、言葉による美術のコミュニケーションと芸術支援の運営能力をもった専門家の養成を目的に、ジャーナリストによる特別講義や、本コンテストの企画運営、また新設のカリキュラムにおけるアトライティング演習などの新しい取り組みを行ったものである。本論文で扱っている「高等学校におけるアトライティングの教育に関する調査」については、直江が単独で実施している。

Learning by Writing about Artistic Experiences The Present Situation and Prospects in Senior High Schools

NAOE Toshio, University of Tsukuba

This paper examines the present situation and prospects of learning by writing about artistic experiences in senior high schools. The author conducted a national survey on this topic in 2004-2005 by using interview and questionnaire methods, and analyzed the respondents' comments on their views of the role of writing in art classes. The result reveals that writing as a reflection on the ideas and intentions of art making is the most frequent practice in art classes instead of writing as a criticism on works of art. It also shows that teachers admit the significance of writing not only in learning art appreciation but also in fostering independent-minded attitudes and improving the quality of art making. Based on the findings in the survey, the author organized a national contest of essays on art in three genres among senior high school students: writing on art making, critiquing art, and reporting on the supportive activities in art. A summary of the achievements in this contest and suggestions for future development are described.